

「三方よし」と「陰徳善事」

有馬 敏則

Toshinori Arima

滋賀大学経済学部 / 教授

近年の世界経済はグローバリゼーションが進展し、瞬時のうちに大量の資金が移動すると共に、一国で起きた財政赤字や経済停滞が、全世界に影響を及ぼすというように、相互関連性が更に強まっている。そのような状況下で、サブプライムローンの証券化商品の暴落に起因する米国の経済停滞や欧州諸国の財政危機の影響を受け、2010年9月より、日本経済は1995年4月19日以来の「\$1=¥79.75」に迫る急激な「円高」に直面し、この円高傾向は当面持続すると予想されている。

しかし、為替相場は常に変動し、「円高」、「円安」の循環的な動きが繰り返されてきたが、永遠に「円高」が続くわけではない。そこで、「円安」になるのをひたすら待つということではなく、また「円高」のデメリットのみを極端に強調して縮小経営に陥ることなく、「円高」を生かした積極経営や、「円高」でも経済成長が達成できる「内需主導型」への日本経済の構造変化を早急に進める経済政策が必要である。

先行き不透明な世界経済状況下で、信念を持って難局に立ち向かうためには、今ほど先人の確固とした知恵や倫理の再評価が必要とされていると言えるのではないだろうか。十分な市場調査に基づいて未開の地に積極果敢に挑戦し、飢饉や不況のときも、「お助け普請」と言われる独自の不況対策を行った、「近江商人の経営哲学と経営倫理」は再検討する価値があると言えるだろう。

その手始めとして、日本が急速な円高に巻き込まれると共に、「世界的大債権国」に大転換した1985年から現在までの経済の変動と人々の行動について概観することにした。1985年9月22日のニューヨーク・プラザホテルでの「G5(先進5カ国蔵相中央銀行総裁会議)」の「ドル高是正」合意

(円高・ドル安に誘導)により、当時の「\$1=¥240」の為替相場が、短時間に「\$1=¥120」へと約50%の急速な円高になった。そのため、日本からの輸出価格が上昇し、日本の輸出企業の国際競争力は低下して日本の輸出が激減し、いわゆる「円高不況」となって、国内経済は急速に収縮した。

この景気悪化を打開するため、1987年2月23日、当時としては史上最低の2.5%へ公定歩合の引き下げが行われ、この水準が27か月間維持された。このため割安に調達された投機資金が、土地や株式、書画骨董等へ流入し、地価、株価、書画骨董等の価格が急上昇した。いわゆる「バブル(泡)」の発生であった。バブルの発生と共に、「一億総不動産屋」とヤユされるように、企業のみならず個人までも国内の土地を買い漁った。さらには「ジャパンマネー」と言われるように、世界中の目ぼしい不動産を買い集めた(現在の中国も「チャイナマネー」と言われるように、世界中の資産や企業・知的財産・資源を大量に購入している)。そしてニューヨーク・ロックフェラーセンタービルを買収するに至り、「我々の心のオアシスを札幌で買い占める日本の成り上がり者」と全米の大きな反感を買ったのは、記憶に新しいところである。

また銀行や証券会社、不動産会社社員等々の中には数百万円、数千万円のボーナスをもらう人も現れ、にわか成金が街に溢れ、世の中はバブル景気に沸き、ディスコ「ジュリアナ東京」で踊り明かすような、刹那的快樂に身を委ねる人も多数見られた。

しかし、1990年になると大きく膨らんだバブルが崩壊し始め、いわゆる「失われた10年」や「失われた20年」と言われる出口の見えない長期不況に突入した。このような長引く不況の中で、自分さえよければ良いという商法が公然とまかり通るようになった。すなわち、有名ブランド牛の偽装や「うな

ぎ」・「たけのこ」・「アサリ」等々の外国産食品の国産品への偽装、「事故米」の食用米への偽装、賞味期限切れの食品のラベル張替え、食べ残し料理の「使い回し」等々の「当然守らなければならない商人のモラル」の低下や、リスクマネジメントを無視した結果の企業破綻といった「経営者の倫理破綻」などの社会問題が、従来以上に次々と多発している。

また近年の日本のみならず世界中の経済社会は、基本となる生産活動すなわち実体経済を無視し、金融取引(マネー取引)に集中して、「浮利」の追求を行い、「カジノ資本主義」や「マネー資本主義」といわれるほど、目先の利益のみを追求する「利益至上主義」の傾向がある。

このような状況下、2008年9月15日のリーマンブラザーズの経営破綻により、全世界は、「百年に一度」と言われる程の、行き過ぎたマネー取引破綻や金融派生商品(Derivatives)暴落に起因する、世界大不況に直面した。その後やっと回復し始めた世界景気は、2010年5月の「共通通貨ユーロ加盟国のギリシャ危機」に見られるような、「放漫国家財政の顕在化」や世界各国の「通貨安競争」により、先の見えない経済停滞に再び逆戻りしている。

現在、進行している世界不況は、個人、企業、国家、そして世界全体に対して、「短期的な利益が長期的利益よりも優先される現代の価値観と行動様式」を、厳しく考え直すことを求めているのではないだろうか。いつの間にか、近年の経済活動から人間の尊厳が消えてしまったと言えそうである。

このように、先行きが不透明で混沌としている今こそ、「山事、際物(きわもの)等、投機的な取引を厳しく戒め、高利を取らず、正直な商いを行う堅実な経営を推進した」近江商人の経営理念や経営手法が持つ普遍性と先見性を明らかにすることは、

極めて現代的課題と言えよう。長期的視野に立った「近江商人の経営理念である『三方よし』や『陰徳善事』」に代表される企業経営、またその精神面を支えた近江商人の篤い信仰心についても検討することは意義のあることと言えるだろう。

II 近江商人の定義と出身地や活動状況・研究状況

1: 近江商人の定義

「近江商人」とは我が国の近世商人類型の代表的な一つであり、また近江国・滋賀県の歴史を語る上でも欠かすことのできない商人達である。そして近江国は、北国街道や中山道、東海道の集まる交通要衝の地であるという、地理的条件や歴史上重要な土地であったことから近江商人と呼ばれる商人を輩出した。

近江商人は、「近江に本宅を据え、近江国外で行商や出店経営に従事した広域志向の他国出稼ぎ商人である」(末永國紀『近江商人学入門—CSRの源流「三方よし」—』サンライズ出版、2004年、p.24)と言えるだろう。その商業活動の特徴としては、近江本国から全国各地に出向く往路で生活必需品を中心とする「持ち下り荷」を販売し、復路で地方特産物を仕入れるという方法や、〔資金調達方法として〕乗合い商い(組合商い)による多店舗展開などが挙げられ、合理的な会計帳簿を作成する商家も現れたのである〔滋賀大学経済学部附属史料館ホームページより〕。

また、近江商人は、他国進出前に十分な「マーケットリサーチ」を行ってリスクを低下させるとともに、「乗合い商い」により少ない自己資本を補いつつ、投資のリスク分散を図り、今日の「ベンチャー企業育成」を目指す投資事業組合の原型を形成したり、「北前船」の運行にあたっては、現在の海

上保険に類似する「海上積金」制度を作って、リスク分散を図るなど、「リスクマネジメント」にも優れていたと言える。

2: 近江商人の出身地と出店の分布状態

江戸期から明治期にかけて、近江商人と言われる多くの大商人が出現したが、それぞれ「八幡商人」、「日野商人」、「湖東商人」、そして「高島商人」と呼ばれる場合が多い。江戸時代における近江商人の出店の分布は、西は長崎・薩摩、東は南部・津軽はいうに及ばず松前・函館・蝦夷地までも進出し、海外にも及んでいた。近江商人は、特に関東・近畿・東北に重点を置いて産業開発に貢献した。近江商人の進出形態は、行商により資産を蓄積し、重要拠点に出店を開き、「出店はさらに枝店を生み、これらを基地として全国各地の物資が転々と流通され、網の目のような商域が繰り広げられ、それによってさらに莫大な商業利潤が上げられる」(江頭恒治『近江商人中井家の研究』雄山閣、1965年、pp.12-13) ことになる。

言い換えれば、近江商人の商法は、街道の重要な宿場に、「八幡定宿」や「日野定宿」と言われる情報の発信・受信基地を設け、それを全国的な規模で拡大していった。さらに行商先で成功すると、「三里四方釜の飯を食う所に店を出せ」のコトワザのように、小さくとも「出店」を形成し、その出店を中心にして「枝店」を出して行商の前線基地とし、巧妙な流通機構を構築していった。このような独創的商法は、現在の商社機能の原型と言われている。

3: 近江商人の取扱品目

滋賀県の各地には、現在でも、編み笠をかぶり、合羽(かっぱ)を着て天秤棒を担いだ近江商人像が、多数残っており、「近江商人の商いの基本は行

商」であると言える。後に豪商と言われた大商人も天秤棒一本から始めた人がほとんどであった。しかし天秤棒で担ぐ商品には限りがあり、得意先が多くなると、販売用よりも商品見本を持ち歩くことが多かったようである。商談が成立すると、飛脚や牛馬、船等あらゆる輸送手段を使って、商品をより速く確実に得意先に届けたのである。

近江商人の取り扱い品目は、生活必需品を中心に多様である。例えば、日野商人は日野椀(おわん)や売薬(萬病感応丸)、八幡商人は萌黄蚊帳(もえぎ色のかや)、灯芯、畳表、扇子、数珠、湖東商人は麻布(かすり、さらし)、高島商人は綿縮(ちぢみ)等々を全国に行商して回り、帰りには各地の産物を持ち帰り、道中の無駄を省いた「のこぎり商法」や「諸国産物回し」を行った。特に山形地方から持ち下った「紅花」は有名である。

そして近江商人全体としては、一般商品の他に、流通業、製造業、金融・保険業や、酒、醤油、味噌等の醸造業経営(とくに関東地方では多かった)にも力を注ぎ、近畿には、北前船を利用した北海道からの数の子、新巻サケ、棒ダラ、昆布、身欠きニシン、等の「おせち料理」の材料を、もたらしたのである。

4: 現代に生きる近江商人

江戸時代以来の商人資本が、それまでの産業の育成に大きな影響を持ち、それらの産業を支え、さらに明治時代になると近代的産業の形成に貢献したのが近世商人であり、近江商人はその典型であったと言えるのではないだろうか。

現存の近江商人系企業の中で最古の歴史があるのは、「布団の西川」で有名な八幡商人の西川甚五郎家(西川産業)であろう(末永國紀行、前掲書、p.40)。江戸に店を構え、400年を超える社歴があり、現在に至っている。

また日本最初の百貨店は、1662年に近江長浜の大村彦次郎を創始者とする、江戸時代からの老舗「白木屋」(後の東急百貨店日本橋店)だと言われている(平成11年1月に廃業、淵上清二『近江商人ものしり帖』NPO法人三方よし研究所、2006年、pp.71-72)。現在でも近江商人の流れを汲む百貨店として、「高島屋」や「白木屋を源流とする西武」等を挙げることが出来る。

さらに現在でも世界有数の商社である伊藤忠商事や丸紅の始祖として著名な初代伊藤忠兵衛は、1842年に滋賀県豊郷村で代々呉服太物商の5代長兵衛の次男として生まれた。2008年12月に創業150年を迎えた伊藤忠商事は、「清く、正しく、美しく」を企業倫理として掲げ、社会貢献活動も活発である。伊藤忠商事の業績を急回復させた丹羽宇一郎社長は、その後会長、相談役を経て、2010年6月から、中華人民共和国駐箚特命全権大使を務めている。

そして1889年日本生命保険を創設した弘世(ひろせ)助三郎は、1843年彦根町に生まれた。保険会社を構想した背景は、延命長寿の神と崇敬されてきた「多賀大社」の信仰者の団体「多賀協会」会員の相互扶助を目的としていたが、後に関西全体に広がった構想となった。また1890年に、現在の滋賀銀行の前身の第133国立銀行を設立するなど、滋賀・大阪での金融機関設立にも多数携わった。日本生命保険は、現在生命保険業界のトップとなっている。

また生産台数世界第一位となったトヨタ自動車の、初代社長豊田利三郎は、1884年彦根町に生まれ、当初伊藤忠商店[現在の丸紅]に勤務した。兄の東洋綿花社長の兎玉一造は、トヨタグループの創祖豊田佐吉の理解者として、佐吉の紡織機開発資金を援助し、さらに豊田紡織の上海進出を支援した。このような状況下で利三郎は、1915年

に豊田佐吉に請われて婿養子となり、伊藤忠商店での実務経験を生かし、豊田紡織の海外事業を進展させる等、理想を追い過ぎるキライがあった佐吉や本家を、地道な経営実務を確実に行うことにより支え続けた。

この他にも、ヤンマーディーゼルの山岡孫吉を始め、数多くの近江商人の流れを汲む企業や個人が、現在でも、近江商人の理念を守りながら、日々活躍しているのである。

5: 滋賀大学での近江商人研究の歴史

滋賀大学でのこのような近江商人研究は、大正12年、滋賀大学経済学部の前身彦根高等商業学校内に設置された「調査課」を母体に、80年以上にわたって行われている。特に1928年に教官会議が近江商人研究を本校の1つの特色にしようと決議してからは菅野和太郎教授を中心に体系的近江商人の調査研究が行われた(陵水会『陵水六十年史』1984年、p.51)。日本の商業史研究の開始は、彦根高等商業学校における近江商人研究であると位置づけられており、滋賀大学は商業史研究のパイオニアであると言える。

また近江商人研究を支える滋賀大学経済学部附属史料館(以下、史料館と略記)は、昭和10年に彦根高等商業学校に設置された近江商人研究室以来、70年以上の歴史を持ち、近江商人に関する史資料の調査・収集と研究を行ってきた。「陰徳善事」の項で後述する、世間に良く知られている「金持商人一枚起請文」の縦書きと横書きの原本も、本館に所蔵されている。

III 近江商人と宗教

1: 近江国の神社・寺院の状況

近江では、古くから神社信仰が強く、神仏習合

時代には、日吉大社が延暦寺や三井寺と並び称せられていた。また仏教文化の歴史的背景としては、「天台宗の山門、寺門派の二大本山と、それに所属する多くの末寺を擁し、野洲郡の錦織寺は真宗本部派の本山となり、宗派拡大の拠点であった。また十五世紀より十六世紀にわたる蓮如や実如などの活躍の場の一中心地が湖東地方以北であった。湖東には時宗の名跡蓮華寺(坂田郡息郷村)があり、神崎郡には臨済宗永源寺派の総本山永源寺(芹川博通『宗教的経済倫理の研究』1987年、多賀出版株式会社、p.567)があったのである。

大正13年の『滋賀県史』によると、明治8年(1873年)末での、滋賀県下の神社・寺院数は以下のようになっている。まず神社は3412のうち、官幣大社1、県社2、郷社20、村社951、無格社2438であった。寺院は3640のうち、天台宗430、真言宗108、浄土宗492、臨済宗158、曹洞宗212、真宗1592、黄檗宗50、日蓮宗34、時宗26となっている。

したがって、仏教の中心寺院としては、「真宗と浄土宗を合せた浄土教2084」、「天台宗430」、そして「臨済宗、曹洞宗、黄檗派等の禅宗420」であったと言えるだろう。しかしながら、近江商人形成と宗教との関係は必ずしも明白ではない。なぜなら、近江商人の宗派所属は、大部分が浄土教とは必ずしも言えないからである。たしかに真宗の篤信者も多いものの、真宗とともに他の仏教を同時に信仰する人や、晩年、出家して禅宗に入った近江商人もいたからである。

2: 近江商人の宗教観と「御先祖様」

近江商人は信仰心が強かったと一般的に言われているが、彼らにとっては、信仰の対象は仏教であると、神道であると、儒教であるとの区別はそれほど重要でなかったようである。たとえば、近江国

五箇荘出身の高田善右衛門家の大福帳の1ページには「神儒佛 謹而禮拜」と書き始めている。また1846年の外村(とのむら)与左衛門家の家訓では、「神社仏閣を尊敬いたすべきこと、常々仏法をよく聴聞し、忠孝を存じ、身を堅固にもつべし、朝夕内仏へ参詣怠るべからず」(小倉栄一郎『近江商人の金言名句』中央経済社、p.112)と説いている。

また近江商人の場合、仏教の教義にもとづく信仰、すなわち絶対者「仏」に対する信仰もあったものの、かなりの割合で、信仰の実態は先祖崇拜であったと言うことが出来る(小倉、前掲書、pp.115-117)。すなわち宗教とは言えないが、店の創設者や中興の祖と仰がれる人々等の絶対者を心に立て、身近な対象に絶対者を具象して崇敬する傾向も強かったようである。とくに「御先祖様崇拜の象徴」である「仏壇」は、多くの近江商人の本宅には必ず設置されていたし、現代でも近江商人宅には見ごたえのある大きくて立派な仏壇が残っている。

近江商人が考える「御先祖様」は、突き詰めて、永続を期待する「家業」のことである。近江商人の家訓に類するものの中には、御先祖様を守るという思想がほとんど例外無しに盛り込まれている。すなわち店(企業体)＝資本は、御先祖様からの預かりもの、店の繁栄は御先祖のお陰、子孫は勤勉で御先祖様の恵に報いると言った、「経営体維持の理念」が成立することになる。したがって主人が家業に励むことは、「御先祖様」の手代に等しいとし、「御先祖様」に奉公していると思うべきであるとしている。

そして近江商人には、「御先祖様」と並んで「世間様」があり、二律背反しないところに実践規範である「近江商人倫理」の特色がある。

3: 近江商人の宗教意識と「家訓や店則」

近江商人の宗教意識を、彼らの家訓や店則から見ると、概ね次の5点に集約できるであろう(芹川博通『宗教的経済倫理の研究』前掲書、pp.579-580)。

- (1) 信心や慈悲の心を忘れてはならない。
- (2) 神仏儒を礼拝しなければならない。
- (3) 仏法を尊重しなければならない。
- (4) 仏事を大切に勤めなければならない。
- (5) 先祖の祭礼を怠ってはならない。

したがって、これらにまとめられる家訓や店則からみえてくるのは、「仏法を信じ、慈悲を持って日常生活を過ごし、先祖の祭礼を欠かさないことによって、家の伝統を守る」という精神である。

近江商人は他国を行き来する「旅人」であり、村を治める代官が発行する「往来手形」と、其の村の住人であることを証明する「宗門改め」を持参しなければならないなかった。「宗門改め」は、その人が切支丹信者ではなく、自分の寺の門徒であることを明記する檀那寺の証明書で、戸籍抄本に相当するものである。したがって、この「宗門改め」を毎年更新するため、村に帰り檀那寺を訪問しなければならないだったのである。帰村の折、檀那寺で執行される御先祖様の法要がまともに出来なければ、まともな取引は出来ないと判断されて信用を落とし、商取引も立ち行かなくなってしまう。その意味で先祖法要は欠かすことの出来ないものであった。

近江商人の家訓や店則は、信仰心に由来している場合が多いことは言うまでもないが、それが何宗であると限定することは出来ない。それよりも上述のように、当時の「宗門改め」等の制度により仏教が普及し、近江商人に定着し、「三方よし」や「陰徳善事」等に代表される精神的支柱になったと言えるのではないだろうか。

IV 近江商人の「三方よし」

1: 「三方よし」と「陰徳善事」とは

近江商人の経営理念として、「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」という言葉がよく知られている。他国での商業活動を行う近江商人は、行商先での信用を築く必要があり、それゆえ、自己の利益よりも、売り手や買い手、その行商地のために思う精神を重視したことから発生したと言えるだろう。しかし商売が順調にいくというだけの理由で、地域のため、社会のために活動しただけでなく、古くからの歴史・文化に育まれた近江独特の生活規範や信仰心に裏付けられた理念であったと言えるのではないだろうか。

全国に出かけて商売を行った独特の経営手法から「三方よし」の精神が誕生し、しかも密かに善い行動をおこなう「陰徳善事」が、近江商人の信条であり、この両者は渾然一体の関係となって近江商人の行動規範となったと言えるだろう。

したがって近江商人は、商品が不足するところに商品を届けることにこそ、商人たる本分を求め、利益のために商売をするのではなく、売り手や買い手、その行商地のために思う精神を重視していたと言える。すなわち、社会貢献活動を視野においた商いを、何よりも大切にしていたと言えるだろう。そして近江商人の経営活動は「三方よし」の精神に代表される「ためになる商売」を行っていたと言えるだろう。

2: 「三方よし」の原典

「三方よし」の原典は、江戸時代中期の近江商人である中村家六代目で、中村治兵衛家二代目宗岸が、宝暦四年(1754年)孫の宗次郎〔四代目治兵衛〕に残した、主文11か条と追記13か条の全文24か条よりなる「書置(家訓)」の中の、主文8条目

の以下の様な文章であると言われている(末永國紀『『三方よし』の原典』『現代に生きる三方よし』AKINDO委員会、2003年、p.32-47)。

「たとへ他国へ商内ニ参候而茂、此商内物此国之人一切之人々皆々心よく着被申候様ニ因、自分の事ニ不思、皆人よく様ニとおもい高利望ミ不申、とかく天道之めぐみ次第と、只」其ゆくさきの人を大切におもうべく候、夫二而者心安堵ニ而身も息災、仏心之事常々信心ニ被致候而、其国々へ入ル時ニ、右之通二心さしをおこし可被申候事、第一ニ候」

これに対し、明治23年〔1980年〕刊行の井上政共編述『近江商人』では、この原文を簡潔にして、以下のように説明している。

「他国へ行商するも総て我事のみと思わず、其の国一切の人を大切にして、私利を貪ること勿れ。神仏のことは常に忘れざるように致すべし」(小倉栄一郎『近江商人の開発力』中央経済社、1988年、pp.10-11)

しかし、この二つの書置のなかには「三方よし」の言葉は無い。何故なら、この言葉は近江商人の活動や精神を研究していた小倉栄一郎滋賀大学教授が『近江商人の経営』(サンブライツ出版、1988年、p.54)の中で、以下のように述べ、造語したのだからである。

「有無相通じる職分観、利は余沢という理念は近江商人の間で広く通用しているが、やや難しい。もっと平易で『三方よし』というのがある。売手よし、買手よし、世間よしという商売でなければ商人は成り立たないという考え方である。時代は下るが湖東商人の間で多く聞く。

初代伊藤忠兵衛は熱心な仏教信者で『商売は菩薩の業』と説いたが、その心は『商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの』という共存共栄の精神である。同

じく湖東商人外村与左衛門家、また、五個荘の中村治兵衛家、山中利右衛門家の家訓にも同じ精神がある。」

また末永國紀同志社大学教授は、『近江商人学入門—CSRの源流「三方よし」—』（前掲書、p.10）で、以下のようにシンボルとしての「三方よし」について述べている。

「現在、売り手よし、買い手よし、世間よしという、商取引においては当事者の売り手と買い手だけでなく、その取引が社会全体の幸福につながるものでなければならないという意味での『三方よし』という言葉は、近江商人の到達した普遍的な経営理念をごく簡略に示すためのシンボルの標語として用いられている。」

「三方よし」の精神については、明治の大実業家であった渋沢栄一氏も『論語と算盤』の中で「倫理と利益の両立」をあげ、国全体を豊かにするため、富は全体で共有するものとして社会に還元すべきと説き、自ら実践した。また松下幸之助氏も種々の講演や著作の中で「三方よし」について述べ、経営で実践している。そして、京都のハカリメーカーの「イシダ」を初めとして、「三方よし」の用語が世界的にも使われ始めている。

3: 「三方よし」とCSR（企業の社会的責任）

よく「三方よし」の精神は、CSR（Corporate Social Responsibility、企業の社会的責任）の先駆けと言われている。近江商人は見知らぬ土地の人に信用されるため、橋を架けたり道路を補修したりして、地域に溶け込む努力をした。三方よしの「世間」は進出先の利害関係のある「地域社会」であり、CSRでいう「社会」よりも狭い概念であったと思われる。しかし「商取引」が売買の当事者だけでなく社会全体に役に立つもので無ければならないことを、「三方よし」の精神として強調すること

は、近江商人の理念をシンボル化したものとして是認でき、CSRの先駆けと言って良いだろう。

V | 近江商人の「陰徳善事」

1: 「金持商人一枚起請文」と「陰徳善事」

近江商人の中で、とくに豪商として知られる中井源左衛門家の初代良祐が、近江商人の真髄を書き残したのものとして有名なものが、「金持商人一枚起請文」である。これは、浄土宗の法然上人の「一枚起請文」に習って書き残したものである。良祐は、浄土宗の信者ながら、深く国恩を感謝し、神仏を崇敬し、神社仏閣への多額の寄付を行い、道路や橋梁を補修する等、多くの陰徳を行った。

「金持商人一枚起請文」は、推敲を重ね完成するまでに、五通りのものがあるとされており、「陰徳善事」をなす善人となることを訓戒したものである。第1図（Web上では公開していません）は滋賀大学経済学部附属史料館に所蔵されているもので、「文化元年(1804年)甲子夏応写、中井光昌敬書」と書かれており、良祐89歳の時、手が震えて書けず、次男の光昌が代筆したものであり、第4番目のものである。最終の第5番目のものは、1805年(文化二年)正月に書かれたものとされる。そこで、第5番目の良祐90歳時に書かれた「金持商人一枚起請文」の原文を、以下に掲載することにした（小倉栄一郎『近江商人の理念—近江商人家訓撰集』あきんどフォーラム実行委員会、1991年、pp.36-37）。

2: 金持商人一枚起請文（1805年）の原文

「もろもろの人々沙汰しもうさるるハ、金溜る人を運のある、我は運なき杯(など)と申ハ、愚にして大なる誤なり。運と申事は候はず。金持にならんと思はば、酒宴遊興、奢(おご)りを禁じ、長寿を心掛、始末第一に、商売を励むより外に仔細は候はず。

(Web上では公開していません)

第1図 金持商人一枚起請文

[出所] 滋賀大学経済学部附属史料館蔵

此外に貪欲を思はば先祖の憐みにはづれ、天理にもれ候べし。始末と吝(しわ)きの違いあり無智の輩は同事とも思ふべきか。吝(りん)光りは消えうせぬ。始末の光明満ぬれば、十万億土を照すべし。かく心得て行ひなせる身には、五万十金の出来るハ疑いなし。

但運と申事の候て、国の長者と呼ぶる事ハ、一代にては成かたし。二代三代もつづいて善人の生れ出る也。それを祈候には、陰徳善事をなさんより全(まったく)別儀候はず。後の子孫の奢を防んため、愚老の所存を書記畢(おわんぬ)。

文化二丑正月 九十翁中井良祐識 男・

光昌敬書

3: 金持商人一枚起請文(1805年)の意味

多くの人々が噂して言うことには、金が溜まる人は運があり、私には運がないなどというのは、愚かであり、大きな誤りである。運と言うことはない。金持になろうと思えば、酒宴遊興や贅沢を禁じて、長生きを心がけ、始末を第一にして、商売に励むことだけだ。

このほかに貪欲をこころざすと先祖の加護を得られず、天の道理にも外れる。始末とケチは違っており、無知な人は同じ事と思うかもしれないが、まったく別のものである。ケチには光が無くなる。始末をしていけば光明に溢れ、10万億土を照らすだろう。このように心得て実行することが出来る人には、5万両、10万両の金が出来ることは疑い無い。

ただ運ということもあるので、国の大金持ちと呼ばれるようになるためには、自分一代では難しい。二代、三代も続いて善人が生まれなければならない。それを祈ろうとすれば、陰徳を積み、善事をする以外に無い。後々の子孫の奢りを防ぐために、老いた私の思う所を書き記す次第である。

文化二年正月 中井良祐九十歳に代わり

次男・光昌が敬って書す

4: 二種類の金持と「陰徳善事」

良祐は、「金持」には二種類があるとする。それは「普通の金持」と「一国を代表する長者と言われるような金持」である。5万両や10万両の財をなす「普通の金持」になれるかどうかは、「運」ではないとする。人は自分の思い通りにならないと、金持になった人の努力を考えず、自分自身の反省無しに、運が無かったと片付けてしまう。しかし、そうではない。酒宴、遊興、贅沢を慎み、長寿を心がけ、「始末」を第一に、勤勉に励んで努力すれば、誰でも「普通の金持」にはなれるとする。

ところが、「一国を代表する長者と言われるような金持」には、自分一代では困難で、二代、三代と「普通の金持」を目指す善人が生まれなければ不可能である。連続して善人が生まれるかどうかは、人間の能力の限界を超えており、「運」である。そのような「運」を祈るためには、座して待つのではなく、社会に「陰徳善事」を行う以外には無いとする。

ここで言う「陰徳善事」とは、先祖や親の代に世間へ善い事をしておけば、子孫の代にそれ以上の善い事として戻ってくるという、対価を求める「功利主義的思考」によって行われるものではないとされる。すなわち、自分の能力限界を意識し、神仏の決定に依存するという心境であり、仏心のように無心で良いことを行うことを意味している。

近江商人が実践した「陰徳善事」は豪商などの「義務」ではなく、奉仕することそのものを喜びとする、仏教の「喜捨」や「施与」の精神であり、社会奉仕という勝れて宗教的経済精神である。したがって、仏教での「布施派羅密多(ふせはらみった)」であり、仏の心に近づく行為として徳を積もうとしたのである。また、近江商人が多額の社会事業に寄付をしたのは、「自分が大を成しえたのは、世間のお陰である。この世間の恩に報いるため」に行った報恩の気持ちであったとも言えるだろう。

「陰徳善事」は近江商人の真髓とされる場合が多いが、近江商人は信仰心の篤い人が多かったことを考え合わせれば、合点できることではないだろうか。「無心の行為」の例としては、飢饉によって困窮した地域住民の雇用創出のための「住宅・寺院仏堂の修築を行うお助け普請」や不作時の年貢の肩代わり、米数千俵の安値販売、治水のための植林事業や桜並木整備、社寺建立、文化振興、滋賀県内外の道路・橋・常夜灯の普請などの公共事業への投資等々数多く挙げることが出来る。

5: 「始末」と「吝(しわ)い=ケチ」の違い

近江商人が良く使う「始末」とは、無駄をせず、ものを大切にする儉約・節約を意味している。しかし無知な人は、必要以上に金品を出し惜しみする「吝(しわ)い=ケチ」と同じと考えがちであるが、両者はまったく別物であると、良祐は強調する。そして欲深く、山事、際物(きわもの)を追いつけると、先祖の加護も無くなり、いずれは貧乏すると戒めており、あまりに計算高いと、人にうとまれると警告している。さらに中井源右衛門二代目光昌は、「書置き、相場の事、やしの儀は、子孫門葉に至る迄堅禁制たるべき也・・・相場・買置の口術は所謂貧乏の所為、人の不自由をめぐり、他の難儀を喜ぶものなれば、利を得ても真の利にあらず、何ぞ久しからんや(『中氏制要』)」と、欲に目の眩んだ不道德な商行為を厳しく禁止している。

これに対して「始末」して財産を貯めれば、世界中を照らす勢いになるだろうと、良祐は論じている。「始末」は貧しいため、やむを得ず節約するのではなく、金はあるのに意識して使い道を考えることである。すなわち、ものを消費し尽くすことにより、ものを活かして使う精神でもある。近江商人は、日常良く使う着物や建材等は、高価ではあっても丈夫

なものを選べば、永く使うことが可能で、真の利益となることを良く理解していたのである。

「始末」と「吝(しわ)い」の違いを説明するのに、お茶を入れる時の例がよく使われる(小倉栄一郎『金持商人一代記』、言叢社、1984年、pp.387-389)。すなわち、ケちな人は茶の葉を一摘み少なく入れる。色濃く出すために、一煎目から熱湯を注ぐ。そのため茶の色はまともでも、一煎目から苦味が走り、茶の良さは無い。二煎目は更に苦く、三煎目には色が落ちて使いものにならない。これに対して「始末」する人は、茶の葉を一摘み多く入れる。一煎目から、湯は湯冷ましで適温まで冷ましてから注ぐ。そうすれば一煎目は、お茶本来の甘みと香りも色も良い。二煎目、三煎目もお客に出しても恥かしくなく、その後は土瓶に入れて家族に下げ渡し、お茶を最後まで使い尽くすことが出来るとされる。一摘みをケチって良さを失ってしまうのと、一摘み余分に使って茶本来の良さを満喫するのとの差が、「吝(しわ)い」と「始末」の違いと言える。

したがって、「陰徳善事」と「始末」の関係は以下のように位置付けられる。すなわち、正当に稼いだ利益を、慈善や寄付等社会のために使う「陰徳善事」は、生きた金を使うという意味では損失ではなく、「始末」に通じることになり、矛盾しないのである。

今日の経済政策の遂行においても、単に数字や目先の事象から判断して「仕分け」を行うのではなく、長期的観点から、「始末」に繋がる効果のある政策決定が今ほど望まれているときは無い。

このように、近江商人の「三方よし」と「陰徳善事」、「進取の気性やチャレンジ精神」「リスク管理に長け、国際的にも通用する豊かな経営センス」は、現在のような社会・経済の大きなうねりの中で、種々の問題を抱える現代企業のみならず、私達にも大きな示唆を与えるものである。

【付記】本研究は滋賀大学経済学部学術後援基金の成果の一部である。記して謝意を表す。

参考文献

- 1 AKINDO 会議編(2003)／『現代に生きる三方よし』／AKINDO 委員会。
- 2 上村雅洋(200)／『近江商人の経営史』／清文堂。
- 3 江頭恒治(1959)／『近江商人』／弘文堂。
- 4 — (1965)／『近江商人中井家の研究』／雄山閣。
- 5 — (1965)／『江州商人』／至文堂。
- 6 近江商人郷土館丁吟史研究会編(1984)／『変革期の商人資本—近江商人丁吟の研究』／吉川弘文館。
- 7 小倉栄一郎(1962)／『江州中井家帖合の法』／ミネルヴァ書房。
- 8 — (1989)／『近江商人の開発力』／中央経済社。
- 9 — (1990)／『近江商人の金言名句』／中央経済社。
- 10 — (1991)／『近江商人の経営管理』／中央経済社。
- 11 — (1991)／『近江商人の理念—近江商人家訓撰集』／AKINDO 委員会。
- 12 菅野和太郎(1925)／『近江商人の研究』／有斐閣。
- 13 サンライズ出版編(2001)／『近江商人と北前船』／サンライズ出版。
- 14 滋賀大学史編集委員会編(1989)／『滋賀大学史』／滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会。
- 15 — (1999)／『滋賀大学史—50周年を迎えて』／滋賀大学創立50周年記念事業実行委員会。
- 16 末永國紀(2004)／『近江商人学入門—CSRの源流「三方よし」—』／サンライズ出版。
- 17 芹川博通(1987)／『宗教的経済倫理の研究』／多賀出版株式会社。
- 18 湖上清二(2006)／『近江商人ものしり帖』／三方よし研究所。
- 19 宮本又次(1941)／『近江商人意識の研究』／有斐閣。
- 20 安岡重明・天野雅敏編(1995)／『日本経営史1 近世的経営の展開』／岩波書店。
- 21 安岡重明・藤田貞一郎・石川健次郎編(1992)／『近江商人の経営遺産—その再評価』／同文館。
- 22 陵水35年編纂会(1958)／『陵水三十五年』／陵水会。
- 23 陵水60年編纂会(1984)／『陵水六十年史』／陵水会。
- 24 渡辺守順(1980)／『近江商人』／教育社。

'Sanpo-yoshi' and 'Intoku-zenji'

Toshinori Arima

This paper considers from a historical point of view the definition of 'The Merchant of Ohmi', the origin place of 'The Merchant of Ohmi' and the distribution of their branches, historical research on 'The Merchant of Ohmi' at our university, institutions of our university related to 'The Merchant of Ohmi', 'The Merchant of Ohmi' and religion, and a review of 'Sanpo-yoshi' and 'Intoku-zenji'.

'Sanpo-yoshi' means 'Urite-yoshi', 'Kaite-yoshi', and 'Seken-yoshi'.

'Sanpo-yoshi' is a coined word by Professor Eiichirou Ogura from our university.

'Sanpo-yoshi' is the Origin of Corporate Social Responsibility (CSR).

'Intoku-zenji' means good behavior in secret.

